

あざなえる縄のごとく

六車 健（教育・昭和52年卒）

四十数年前の香川大学入学式のことを、今でも思い出すことがある。教育学部にある、かまぼこ型の体育館に全学部の入学生が集っていた。外で新入生勧誘の声が飛び交う中、体育館内には厳粛な空気が流れていた。

当時の学長の顔も名前も思い出せない。式辞の内容も覚えていない。ただ学長が「禍福はあざなえる縄のごとし」ということわざを、式辞で引用された。それが何とも心に残っているのである。なぜだろう。

当時の私は、大学でしっかりと学問を学び立派な教員になりたい、と希望に胸をふくらませていた。それなのに、真理を究める学問ではなく、なぜ幸不幸のことを語られるのだろう、という違和感だったのか。

あるいは、縄という言葉から我が家の縄ない機械を思い出したからなのか。父母は二毛作のかたわら牛を飼い、縄をなって蒔やかますを作っていた。そのわずかな現金収入で家族を養い、私だけが大学に行かせてもらえた。

もしかして学長は、大学の先にある人生の話としてことわざを引用されたのかもしれない。より合わせた縄のように、この世の幸不幸は入れかわりながら変転するが、一喜一憂せずに前へ進め、と。

教員のスタートは岡山県の島の分校だった。戦後入植した人々が島を離れる中、ミカン農家3軒の子弟を受け持った。保護者の生き様から故郷への思いにかられ、私は受け直して香川県に戻った。

転勤により学校を離れた。我が子が小学生の頃で、起きる前に出かけて寝た後に帰る日々が数年続いた。何より目の前に子どもがいない淋しさ。その一方で、県下一円の小・中・県立学校を訪れさまざまな子どもたちに出会うことができた。

まだまだある。振り返ってみると私の教員生活もことわざと同様であったなあ、としみじみ思う。いつしか私の処世訓は「向き不向きより、前向き」になっていた。